

学位論文要約

清末日本語教育史の研究

—教科書と学習書の分析を中心に—

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

魏 維

1. 論文題目：

清末日本語教育史の研究
—教科書と学習書の分析を中心に—

2. 論文構成：

第一章 序論

- 1.1 研究背景
- 1.2 先行研究と問題点
- 1.3 清末日本語教育が看過された理由
- 1.4 本研究の位置づけ
- 1.5 論文の構成

第二章 清末日本語教育の類型と日本語教科書・学習書

- 2.1 清末日本語教育の類型
- 2.2 分析対象とする清末日本語教科書と学習書

第三章 清末日本語教育における音声教育

- 3.1 清国本土における東文館並びに東文学堂の日本語音声教育
- 3.2 留学生の日本語音声教育——『日本語教科書』を通して
- 3.3 近代的な学校における日本語音声教育
- 3.4 まとめ

第四章 清末日本語教育における文法教育

- 4.1 清国本土における東文館並びに東文学堂の日本語文法教育
- 4.2 留学生の日本語文法教育——『日本語教科書』を通して
- 4.3 近代的な学校における日本語文法教育
- 4.4 文型を主とした清末の日本語文法教育について
- 4.5 まとめ

第五章 独学による日本語学習法

- 5.1 『和文漢読法』における音声と文字の分離
- 5.2 『寄学速成法』における音声教育と文法教育
- 5.3 まとめ

第六章 清末日本語教科書・学習書からみる清末日本語教育の特徴

- 6.1 中国語の言語知識を援用した清末日本語教育
- 6.2 教育内容からみる知識教育の時代

6.3 日本語教育観と日本語学習観に見られる教育意識の二分化

6.4 まとめ

第七章 結論

7.1 本研究のまとめ

7.2 今後の課題

3. 研究の目的

日清戦争を境に、清国国内の状況が大きく変化した。言語生活の面での大きな変化は日本語教育の実施であると言える。台湾において、日本語（国語）教育は同化政策の一つとして行われるようになった一方、清国本土では、自主的、自発的に日本語を学び始めた。しかし、植民地における「国語教育」の時代と位置づけられた近代日本語教育史において、清末日本語教育のような自主的、自発的な日本語学習活動は看過される傾向が見られる。

したがって、本研究の目的はこれまでの研究で看過されてきた清末の日本語教育を近代日本語教育の一部として捉え、現時点で清末の日本語教科書・学習書として使われていたことが判明しているものを研究対象とし、言語教育の視点から当時日本語教育の実態を明らかにすることである。

4. 研究の方法と内容

研究方法としては、まず先行研究や資史料を踏まえ、清末の日本語教育に関わる歴史的背景を把握した。次に、関連する人物、新聞記事、日記、回顧録、日本語教科書・学習書など清末期の日本語教育に関する資史料の保存情報を収集し、日中両国の各地図書館に史料調査を行い、必要な史料について複写を行い、集積した。最後は収集した資史料を中心に解説、分析を行い、当時の日本語教育の実態を実証した。本研究は、「清国本土における東文館並びに東文学堂の日本語教育」、「清国留学生の日本語教育」、「近代的な学校における日本語教育」、「独学の日本語学習活動」という4つの類型に分類し、それぞれで用いられた日本語教科書・学習書を考察し、以下のような順序で分析を進めた。

第一章では、まず清末日本語教育の行われた背景やそれに関する研究の現状を説明し、ほぼ同時期に始まった台湾における植民地の「国語教育」と比較しながら、先行研究において清国本土で行われた日本語学習活動が看過されてきた理由について分析した。また、清末日本語教育が近代日本語教育史においていかに位置付けられるべきかを述べた。

第二章では、清末の日本語教育を「清国本土における東文館並びに東文学堂の日本語教育」、「清国留学生の日本語教育」、「近代的な学校における日本語教育」、「独学による日本語学習活動」に分類し、多様な日本語学習活動が行われた背景や内実を説明した。さらに、こ

の分類に基づき、当時刊行された複数の日本語に関する教材の中から、現時点で実際に日本語学校において教科書や独学向けの学習書として使用されていたことが判明しているものを取り上げた。具体的には、清国本土の日本語学校教育を代表する教科書として『日語入門』と『日語独習書』、清からの留学生向けの日本語教科書『日本語教科書』、近代的な学校における日本語教育を代表する教科書『日語読本』と『東文法程』、合わせて5種類を研究対象とした。さらに、学習書として『和文漢読法』と『寄学速成法』を研究対象とした。

コミュニケーションを目的とする今日の言語教育と異なり、読書・翻訳を目指す清末の日本語教育において、音声教育に対する観念や教育方法がいかなる形で行われていたのかを究明する必要がある。したがって、第三章では、言語教育の視点から清末の日本語学校で使用された日本語教科書を五十音図、文字の読み方の表記法や、教育者の立場から当時の音声教育の問題点がいかなる形で捉えられていたのかを考察することによって、清末日本語教育における音声教育の実態を探り、様々な形で行われた日本語音声教育の特徴を明らかにする。

第四章では清末に編集された日本語教科書に用いられている文法教育の方法について言語教育の視点から検討する。具体的には、清末の学校における日本語文法教育を「清国本土における東文館並びに東文学堂の日本語教育」、「清国留学生の日本語教育」、「近代的な学校における日本語教育」に分けて、当時の文法教育がいかに実施されたのか、どういった文法知識が重視されていたかなどを明らかにした。

西洋文化を求めていた当時の清国の知識人は「同文同種」の観念に影響され、短期間で日本語が習得できると考えていた。従って、清末の日本語教育においては、独学による日本語学習活動が特別な存在として発展してきた。第五章では、独学向けの学習書として使用された『和文漢読法』と『寄学速成法』を比較しながら独学による日本語の短期習得法を音声、文法という2つの側面から考察を行った。特に、日本語教育史研究においては欠落している『寄学速成法』に焦点を当て、その特徴を考察した。

第六章では、各章の分析で得られた結果を総括しながら、清末日本語教育の特徴について考察した。特に、清末の日本語は西洋の先進文化を導入する媒介となり、和書に掲載された西洋知識や技術などを獲得することが清末日本語教育の目的ともなった。このような背景が清末の日本語教育にどういった影響を与えていたかを検討した。

第七章では、以上の分析と考察をまとめる。今後の研究課題と研究の展望について述べた。